

カメラ紀行

越中おわら風の盆を訪ねて

副会長 上野山 信一

去る9月1日、公民館のダンス仲間、うら若き女性（大昔のこと）2人に誘われ、はるばる越中富山まで出かけることになりました。当日の天気予報によれば、曇り後雨ということで、出発の時点から空模様を気にしながらの旅でした。

家内が焼いて持たしてくれた手作りのパンを、車中の向う三軒両隣に配りまして、お宅はパン屋さんですか？との質問をうけながら、賑やかでした。午後4時過ぎ現地の越中八尾(やぶ)駅（高山本線の富山駅から4つ目）に降り立つと、町全体が踊りの熱気に包まれ、大勢の見物の人また人の波、さすが日本屈指の踊りだと感じさせられました。駅から40分位歩いたところの、小学校の校庭が競演場とのことで、人波をかきわけて急ぎ足でかけつけました。

ところが、会場の前まで来た時悪い予感的中し、小粒の雨が大きくなり変わり、踊りを見物するどころか、傘をさした人波に押し寄せ、状況判断を迫られ、ここをあきらめて途中にあった聞名寺に引き返しました。この本堂で踊りが行われ、その時は雨も少し小降りになって、やっと我をとり戻して、カメラを構えれど人の頭ばかり、思うようなアングルがとれず苦労しました。この踊りは300年の歴史をもち、哀調のなかにも優雅さを秘めた唄と踊りに、たいへん感銘をうけました。

見物が終わった時は、汗と雨で全身がびしょ濡れのありさまで、そのうえ帰る途中の大雨もあって、道路は川の中を歩いているようでした。やけくその気持ちで駅に到着、真夜中12時発の貸切車で、岡山駅に翌朝9時過ぎに無事到着することができました。その時の労作(?)をご披露します。ただ、写真ではあの唄声は聞えないのが残念です。



夏休み中のラジオ体操

恒例の夏休み中の小学校児童によるラジオ体操は、お盆をはさんで2期に分け、田中野田1号公園で朝6時半から行われました。これには父兄や幼児、老人会も加わって三世交代のかたちとなり、毎回120人前後の参加者でした。子ども会育成会の方々には、いろいろお話をいただき、ありがとうございました。



夏休み中のラジオ体操（田中野田1号公園）

晴れの国とは

岡山は自稱「晴れの国」と云っている。これは降水量（降水量1^{mm}以上の日）が、全国で最も少なく、年間87.4日であることに由来する。ちなみに、次点は意外にも帯広の87.9日、隣の高松は99.5日（全国13位）である。

岡山の年降水量は1159.7^{mm}で、これは名古屋以西では、最も少ない高松（1147.2^{mm}）に次ぐ。

岡山の年日照時間は2083時間で、全国80観測地点中多いほうから9番目である（最多は足摺岬の2183時間）。月別では8月が最高で231時間、最低は2月の136時間である。なお岡山に次いで多いのは甲府の2075時間であるが、ここでの最高は3月（202時間）、最低は9月（131時間）で、月別の状態は岡山と対照的で興味深い。

（国立天文台編：平成7年版理科年表より）

虫のはなし(2)

虫の鳴き声

平尾 重太郎

鳴く虫はさほど多くはない。スズムシやマツムシ、キリギリス、セミ、コオロギなどが身近な鳴く虫である。すでに鳴く虫のシーズンは過ぎてしまったものもあるが、これからは秋の夜長、スズムシやコオロギの音色を楽しむことができる。

鳴く虫、正確に言えば発音する虫ということになるが、虫は口ではなくいろいろな方法で音色を出している。そして、鳴く虫はほとんどがオスで、メスは鳴かない。彼にとって鳴くことはメスへの「求愛歌」で、これによりオスがメスを誘引して、交尾という目的を果すことになる。これは種族保存のための自然の理である。鳴かない虫は、他のいろいろな方法で交信して、オスとメスが近寄る。

音を出す方法はいろいろで、スズムシやコオロギは羽と羽とをすり合わせて振動音を出し、その音色はとても美しい。セミのオスには、腹の中にふくらんだ薄い膜の袋があって室を作り（共鳴室）、V字形の発音筋が振動すると、室の中の空気が振動して大きな音を出す。メスは共鳴室がないので鳴かない。バッタ類は前の羽と後足を摩擦して発音する。例えば、バッタ類でも種類により微妙に音色が異なり、メスは当然それを聞き分けて、同じ種類のオスに近寄ることができ、交尾に至るのである。

鳴き声といってもカ（蚊）の鳴き声は一風変わって、「カの鳴くような……」の言葉があるようにか弱い。カの場合にはメスの羽音にオスのほうが誘引される。そして、当然カの種類により羽音の周波数（音のリズム）が異なるが、それを聞き分けて同じ種類の者同士が近寄り結ばれる。

さて、スズムシの鳴き声についてみよう。スズムシは、最近ではデパートでも売っており、飼育して鳴き声を楽しまれた方もあろう。「リーン、リーン」と鈴を振るような澄んだ美しい鳴き声は、秋の夜の風情をそえる。鳴くすがたは涙ぐましいほど真剣である。羽をピンとはねあげて、全身の力をふりしぼって羽の根元をすり合わせ、羽全体に振動音を出すのである。成虫になって間もない若い頃は、「リ・リ」とギコチないが、10日もたつと鳴き声もほんものになって、かなり遠くまで響きわたる。しかし、成虫になってから1か月もたつと、毎日鳴いているため羽の摩擦する部分がすりへって、音もだんだん消えてゆき、羽もぼろぼろになってくる。それでもなお鳴き続けるのだからいじらしい。オスが鳴きはじめると、メスが徐々にオスのそばに寄りそってゆき、やがてめでたく交尾ということになる。